

□ 次の傍線部の漢字をひらがなに、カタカナを正しい漢字に直して答えなさい。

- ① 丹念に皮革製品の手入れをする。
- ② 分別のある行動が求められる。
- ③ 教師から読点の打ち方を指導された。
- ④ ようやく体調改善の兆しが見え始める。
- ⑤ 議長の判断により決を採る。
- ⑥ 事故が起こり、フツキュウには時間がかかりそうだ。
- ⑦ 事実にもトづく報道を心がける必要がある。
- ⑧ 団長が勇士をヒキいて大通行を行進する。
- ⑨ 親身なカンビョウのおかげで早く退院できた。
- ⑩ コクリイが多すぎてかたよった食習慣だ。

□ 次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、本文には省略があります。

― 文章Ⅰ ―

① ひと口に「読む」、といいますますが、読むとはどういうことか、あまり考えたことのない人が非常に多いようです。学校で国語を教えている先生にしても、「読む」ことについて、きちんと考えたことのある人は少ないのではないのでしょうか。それで、本当の読み方を学校で教わることがないまま、こどもは我流に本を読むようになるほかありません。(X)、せっかく読むことを覚えても、あつという間に時間をテレビに取られてしまうのです。これでは、本を読む人間が少なくなるのも当然です。「読む」ということを考えると、読み方には二通りあることがわかります。

② ひとつは、文字に書かれていることが、既知、(Y)、あらかじめ知っていること的时候。「さいた、さいた、さくらがさいた」という文章なら、小学一年生でも、なんのことかすぐに理解できます。このような読み場合は、声に出して読むだけで、読書は完了してしまいます。これを「既知の読み」といいます。

③ 同じように、遠足から帰ってきたこどもが、いっしょに行った友達の書いた遠足の作文を読むようなときや、前の晩、テレビでじっくり観たプロ野球の試合の記事を、翌日の新聞で読むときも、この既知の読みになります。既知の読みの場合は、ゆつくりと丁寧に読まなくても、ざっと読めばわかります。内容がわかっているからです。同じ記事でも、テレビを観なかった人や、球場で観なかった人には、それほどよくわかりません。スポーツ記事で人気のあるのは、読者のよく知っている試合などであって、よく知らないことは、読んでもわからないものです。日本ではほとんど行われないクリケットの試合の記事などは、ほとんどの人が、読んでもよくわからない、1 となります。

④ このように、わかっていることの書いてある文章は読んでおもしろく、よくわかります。こういう読み「既知の読み」を、かりに「アルファ読み」と呼んでおきます。

⑤ これに対して、「ベータ読み」という読み方があります。書いてあることが、読者のまったく知らない、未知のことがらの場合です。(Z)、ある小学六年生が、「ことばと、それを表す、ものごとの間には、切っても切れぬ結びつきはない。」という文章を読んで、まったく意味がわからなかったといいます。そこで、ことばの意味がわかれば理解できるはずだと思い、ことばのひとつひとつを辞書で引いてみたのですが、かえって混乱して、いっそうわからなくなったそうです。

⑥ それは、内容が、読む者の理解を超えているからです。つまり、自分の知らないことを活字から読み取るためには、ベータ読みという読み方が必要です。それをすでに知っていることを読むアルファ読み

みで、読もうとしたからわからない^Cのです。

⑦ アルファ読みは、すでに知っていることを読むときの読み方ですから、新しい世界が広がることはありません。アルファ読みしかできない人^Dは、本を読んでも、本当に読んだとはいえない^Eのです。

⑧ これに対して、ベータ読みができれば、わからないことを読んで、きちんと理解することができます。知らないことを読んで、知見をひろめ、こころの世界を拡大していくことができます。ベータ読みができてこそ、本当に読める、ということができるのです。

⑨ ベータ読みをするには、思考力を使わなくてはなりません。想像力を働かせ、わからないことがあっても、自分の頭を使って解釈しながら読むのが、ベータ読みです。そうやって読み進めていくと、どうにか、自分なりにわかった、というところまでいくことができます。すると、やがて、ベータ読みができるようになります。そうして、人は、活字から未知を読み取ることができるようになるのです。これが本当の読書というものです。

— 文章Ⅱ —

江戸時代に行われていた読みの教育に、素読というものがあります。素読は「そよみ」「すよみ」とも言われるもので、今でいえば、音読にあたります。ただし、普通の音読と異なるのは、意味をいっさい考えずに、ただ声に出して読むということです。

江戸時代のテキストには、「論語」、「孟子^{もうし}」、「大学」、「中庸^{ちゅうよう}」など四書五経が用いられました。これらは、中国の古典中の古典ですから、もちろん生やさしい文章ではありません。おとなでも、そう簡単に理解できるものではないのです。それを、幼い子どもが、わけもわからずに、音読するのです。意味はごく簡単に説明することはあっても、いずれ自然に、わかってくるはずだと考えられました。とくべつ、教わらなくても、わかってくるはずだとされたのです。

幼い子に、まったく知らない文字を無理やり読ませる。そして、意味の説明はしない。そんな無茶なことをさせて、いったいなんの役に立つのか……。いまなら、そういうに違いありません。こどもの発達段階をまったく無視したこの学習法は、いまの教育から見ると、乱暴きわまりないものに映ります。けれども、当時は、そういう疑問をもつ人も、いませんでした。それは、素読という教育法が、長い間、りっぱな成果をあげていたからです。江戸時代には、ほかに教育らしいものも受けず、素読をただだけで、学問をしたことになっていました。

素読を教えていた人たちも、素読という読みの学習法を考え出した人たちも、この方法の効果について、いろいろと考えていたに違いありません。そして、この方法によらなくては、文章を本当に読めるようにはならないという事実を見抜いた^ぬうえで、この素読^④学習法を確立したはずで、これが、長い間、いのちをもって受け継^つがれてきたのです。

日本だけではありません。欧米^{おうべい}、とくにヨーロッパにおいても、古くは、ラテン語によって、素読に近いことがずつと行われていました。^⑤偶然^{いっちょ}の一致^{いっし}のようですが、じつは、そうではありません。本を読むことを学ぶときに、もつとも有効なのが、この方法だということを、ほかの国の人々も、経験的に知っていたのに違いありません。

事実、この教育法には、いまの学校教育では教えられないところを、しっかりと教える効果があります。

いまのこどもが、未知を読むベータ読みがなくなっているのは、学校の国語教育で、アルファ読みからベータ読みへの移行をきちんと学習できていないのが、ひとつの原因です。なぜ移行ができないのかというと、アルファ読みばかりを学習させているからです。

こどもの発達段階にしたがって、既知^{りく}を読むアルファ読みから、すこしずつ程度を上げて、未知を読むベータ読みへ達するということは、理屈^{りくつ}のうえでは、できそうに思えるかもしれませんが、けれども、

じつは、アルファ読みとベータ読みは、ひとつの階段で結ばれているのではないのです。アルファ読みの階段をひとつひとつ上がつていけば、自然にベータ読みができるようになるというものではないのです。

既知を読むアルファ読みと未知を読むベータ読みとの間には、大きな切れ目、断絶があります。ベータ読みの階段へ飛び移るためには、この切れ目を飛び越さなければなりません。アルファ読みが完全に来たとしても、なお初歩的なベータ読みすらできないのは、このためです。

いわゆる教育を受けたといわれる人たちのなかにも、これまで一度も本当のベータ読みをしたことがないという人は、数多くいます。一生の間、一度もベータ読みをしないで終わってしまう人もいます。テレビならわかる。読み物でも、ゴシップや物語、小説ならわかる。新聞でも、社会面ならわかるけれども、社説や論説は、どうも固くてもおもしろくない、などというタイプの人です。これはベータ読みができないために、読んでもわからないのです。⑥

読みの 知らず、です。

(①、②とも、外山滋比古「わが子に伝える『絶対語感』」による)

問一 () X Y Zにあてはまる最適な語を、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。なお、記号は一度しか用いません。

ア だから イ つまり ウ しかも エ あるいは オ なぜなら カ たとえば

問二 傍線部①「本を読む人間が少なくなるのも当然です」と筆者が考える理由を、文章Ⅰの語を用いて説明しなさい。

問三 傍線部②「読み方には二通りある」とありますが、その「二通り」の内容を、文章Ⅰの語を用いて、三十字〜三十五字で説明しなさい。

問四 [] 1にあてはまる最適な語(形容詞)をひらがな五字で答えなさい。なお、この語は、文章Ⅰのある形容詞の反対語です。

問五 傍線部③「ベータ読み」は人にとってどのような影響をもたらすと、筆者は考えていますか。文章Ⅰから二十五字〜三十字で探し、最初と最後の三字を抜き出さなさい。

問六 二重傍線部A Y E「ない」の中で、一つだけ文法的に異なっているものを記号で答えなさい。

問七 文章Ⅰを、内容から四段落に分けると、どのように分けられますか。次から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア [1] — [2]・[3] — [4]・[5]・[6] — [7]・[8]・[9]

イ [1] — [2]・[3]・[4] — [5]・[6] — [7]・[8]・[9]

ウ [1]・[2] — [3]・[4] — [5]・[6]・[7] — [8]・[9]

エ [1]・[2]・[3] — [4] — [5]・[6]・[7] — [8]・[9]

問八 傍線部④「素読学習法」ではどのような「読む力」を養えたと考えられますか。文章Ⅰの語を用いて、三十五字〜四十字で説明しなさい。

問九 傍線部⑤「偶然」の反対語を漢字で答えなさい。

問十 傍線部⑥を、「難しい言葉を表面上は理解していても、その内容を実行できないこと」のたとえを表すことわざになるように、二つの [] にあてはまる漢字二字の語を文章Ⅱから抜き出さなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の咲良は中学時代にバレーボール部に所属し、レギュラーで活躍していたが、全国大会でのミスを機にバレーボールを辞めて、高校進学後は、陸上部リレー班のマネージャーとなって初めての夏を迎えていた。そして、リレー選手たち（レギュラー…天野・東平・堂本・山下、補欠…大黒）は三年生最後の大会となるインターハイでの優勝を目指して練習に励んでいた。

その日のリレー練習は通常通りに行われたが、終わりのミーティングで大熊先生が突然の発表をした。「インターハイ、リレーは天野に代わって大黒」

「えっ」

大黒は目の前で風船でも割れたみたいな顔になった。ほかの部員もあつけにとられた顔をしている。

「なんでですか？ 天野先輩めっちゃ調子がいいじゃないですか」

いち早く東平が声を上げた。

「そうですよ。ほかのやつならまだしも、天野はいちばんタイムがいいんですよ」

つい気色ばむ大黒に、堂本も続ける。

「それに天野先輩は三年生ですよ」

三年生にとっては高校生活最後の夏であり、部活の締めくりだ。そのラストを悲願のインターハイで飾れるとあって、確かに天野は張り切っていた。

それなのにどうして？ 誰の胸にも同じ疑問が湧いているようだった。

「右足の古傷ちゃんがねえ」

興奮気味の部員たちをなだめるように、天野は右足に視線を落とし、ため息をついた。だがもちろん

堂本は納得しない。

「え？ 今日だって、大丈夫だったじゃないですか。まったく問題なかったですよ」

バトンを受け取る際に気がつくこともなかったらしい。

「そうだよ。足が痛いなんて気がつかなかったよ」

「ですよ。自分もぜんぜん気がつきませんでした」

大黒が言うのに、東平は大声で同意し、山下も ① うなずいた。だが、天野は言った。

「ところがひとり気がついた人がいたんだな」

② 視線を咲良に流す。

「咲良ちゃんが気づいちゃったんだな」

みんなの視線が集まって、咲良は ③ 肩をすばませる。

そんな咲良を見て、天野はなぜか愉快そうに笑った。

「誰にも気づかれなければ、やり過ぎせると思ったんだけど、わかっちゃったらしかない」

「そうだな」

先生もうなずく。

「なんか、すみません」

咲良はかえって悪いことをしたような気になったが、天野は首を振った。

「咲良ちゃんがあやまることないっしょ。むしろよかったよ。無理したら将来にも影響があるかもしれないんだから。俺、この先も陸上続けるつもりだし」

③ 気分を変えるように言う天野を、大熊先生は気づかうようにたずねた。

※ 「じゃあ、個人も今回は見送るか？」

と、天野は即座に反応した。

「それは出ますっ！」

はね返すような声だった。

「走りたい。走らせてください」

一瞬、場が静まった。咲良も息を呑み込んだ。

※「山科に勝ちたいんだ。いや、勝てなくても一緒に走りたい」

絞り出すように天野は言った。みぞおちのあたりから、熱いものがこみ上げた。天野は山科と大好きな走りを共有したいのだ。咲良はあふれそうになる涙を必死にこらえた。同時に、天野の自己規制の厳しさにも気圧されそうになる。

真に痛いのはどっちだろう。脚と心と。

天野は本当はリレーにだって出たいのだ。

「すごかったね、咲良ちゃん」

※マネージャー室で咲良は直から声をかけられた。

「天野くん、脚の不調によく気がついたね。あの人、絶対調だったのに」

直は素直に感心したようだった。咲良の頬は赤くなる。直からこんなにほめられたのは、初めてではないだろうか。

「私、クラスも一緒なのに、ぜんぜん気がつかなかった」

「天野先輩はちゃんと隠してたから、普通は気がつかないと思います」

④言いながら咲良は、だから自分は気がついたのだと改めて思った。

「私はおなじことしてたから、わかったんです」

ちよつとやそつとの痛みやけがは、周囲に悟られないようにする選手は少なくないが、咲良はその思いが強かった。相手には当然のこと、チームメイトにさえ弱みを見せたくはなかった。余計な気づかいはいらないし、フオローが試合の邪魔になると思っていた。ともかく自分自身の力でやりとげたかった。大切なのはチームよりもまず、自分。

「だから、天野先輩はすごいな、と思いました」

咲良はまだ残る胸のうずきを感じながら言った。

あるとき、バレーの全国大会で、あっさりけがを認めて自分が引いていればせめてあの試合は勝てたかもしれない。痛みをこらえるばかり、体と心がぶれた自分よりも、戦える選手はほかにいただろう。でもそれよりも譲りたくない気持ちの方が強かった。

「リレーでなら、インターハイでメダルの可能性があるから、天野先輩だって本当はそれにかけてみたかったんだと思います」

「……そうだね」

直は少し黙ったのち、つぶやいた。

(まはら三桃『疾風の女子マネ!』)

※個人：個人種目の百メートル走。山科：他校にいる天野のライバル選手。

直：三年生の女子マネージャーの先輩。しっかり者で誰に対しても厳しい。

問一 傍線部①「風船でも割れたみたいな顔」とはどのような思いを表していますか。最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おそれ イ いかり ウ うれしさ エ おどろき

問二 傍線部A「あつけにとられた」、傍線部B「気色ばむ」の語の意味として最適なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

A「あつけにとられた」

ア 意外なことにいくわし、非常におどろき、あきれた。

イ 思いもよらないことに対して疑いの気持ちを持った。

ウ 想像もつかない事態に直面して、それを打開しようとした。

エ 気にも留めなかったことを突然指摘されて、びっくりしていた。

B「気色ばむ」

ア あせって顔色が青ざめる。 イ むっとして顔色を変える。

ウ うれしさが顔に表れる。 エ 困ってしぶい表情をする。

問三 1に3あてはまる最適な語を、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。なお、記号は一度しか用いません。

ア やつと イ ずつと ウ すつと エ さくつと

オ こくりと カ ぎくつと キ ふむふむと

問四 傍線部②「天野はなぜか愉快そうに笑った」とありますが、その理由として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 陸上部のリレーメンバー全員が自分のことを考えてくれている気持ちに触れたから。

イ 咲良が気まずい思いをしてはいけな^いと考^えて、その場の雰囲気^{ふんいき}を切り替^かえようと思^{おも}ったから。

ウ 脚^{あし}のけがの状態がひどく、リレーから外れることは今後の陸上競技を続ける上で正解だから。

エ 誰にも気づかれないようにけがを隠していたのに、咲良がしっかりと見ていてくれたから。

問五 傍線部③「じゃあ、個人も今回は見送るか?」という大熊先生のことばに対する天野の返答から、天野のどのような思いが読み取れますか。「個人種目」「リレー」という語を用いて説明しなさい。

問六 傍線部④「咲良は、だから自分は気がついたのだと改めて思った」とあるが、それはなぜですか。本文中の語を用いて説明しなさい。

問七 本文中では、けがをした選手がスポーツの団体競技に参加するかしないかという判断や行動が描かれて^{えが}います。では、あなた自身がけがをした選手になった場合、あなたはスポーツの団体競技に選手として参加しますか、参加しませんか。理由も合わせて、八十字以上百字以内で述べなさい。

問八 次のア～エについて、本文の描写^{びやうしゃ}についての説明として正しければ、「T」、誤^{まち}っていれば、「F」と解答欄^{らん}に記しなさい。

ア 過去の場面での心情を描くことで、現在の場面で起きていることへのつながりを表現している。

イ 主人公の咲良の視点からすべての物語を叙述することで、咲良の心情を強調している。

ウ 比喩^{ひゆ}表現や倒置法^{とうちほう}などの表現技法をまったく使わず、直接的に事実を分かりやすく表現している。

エ 会話を多用して、それぞれ登場人物の思いが読み手に伝わりやすくなっている。

問題は以上です。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

つく

いて

し

る

問一 X

Y

Z

問二

問三

30

35

問四

問五

問六

問七

問八

40

35

問九

問十

問一

問二 A

B

問三 1

2

3

問四

問五

問六

問七

80

100

問八 ア

イ

ウ

エ

座席番号

受験番号

氏 名

計

※

※

※